



最近の多様性 (ダイバーシティ) に想う

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 評議員
シンジェンタ ジャパン株式会社 研究開発本部長

小路口 聡

近年、いろいろな場面で「多様性 (ダイバーシティ)」という言葉が使われるようになった。ビジネスにおいては、多様な人材を積極的に活用しようという考え方として浸透している。また、教育現場でも、一人一人の個性、特性をお互いに認め合い、大切にしようという考え方として用いられる。地球環境においては生物の多様性である。動物、昆虫、植物など、多くの種が共存することに意義があるという考えで、種の減少を防ぐために絶滅危惧種を保護するなどの活動が行われている。

私が「多様性」と聴いて一番に思い出すのは、弊社が企業活動の一環として2003年(平成15年)から支援してきた、宮城県JAみやぎ登米の「環境保全米 田んぼの生き物調査」である。JAみやぎ登米管内は県内屈指の米の産地であることから、「赤とんぼが乱舞する産地を目指そう」を合言葉に、環境や生態系への負荷の軽減を考え、農業や化学肥料の使用量を低減して栽培する「環境保全米」の取り組みを行っている。毎年6月に、この環境保全米の圃場に生息している生物を採取し、生態系の保存状況を目で見て確認しようと、JA職員、生産者、地域の方々など様々なステークホルダーを迎えて開催しているのが、この生き物調査であり、地域社会と参加者の交流の場も担っている。

私は2010年秋に仙台に赴任し、2011年から生き物調査を担当することになった。その矢先に発生した東日本大震災により、生活も農業も大きな被害を受け、当時は全てのことそれがそれまで通りに営まれるのは不可能ではないかとさえ思われた。田んぼはひび割れ、農道や畦畔も壊れていて、こんな状況で生き物調査を実施してよいものか迷ったが、関係者と協議し、こんな時だからこそ継続することに意義があると2011年6月の調査を決行した。すると、多くの生産者や近隣の小学生たちが集まり、50種類以上の水生生物(アキアカネ、ヨーロッパカブトエビ、トウキョウダルマガエル等)を確認することができた。生き物の生命力を実感するとともに、震災からの復興に希望を持つことができた活動であった。

その後も活動を継続した結果、2015年に生物多様性の保全に優れた活動をする企業や団体などを表彰する「第4回いきものにぎわい企業活動コンテスト」において農林水産大臣賞を受賞することができた。活動を継続してよかったと心から思う。

さて、最近、テレビ番組で「池の水ぜんぶ抜く」というのが人気だそうだ。これは住民などの要請を受けて各地にある池の水を抜き、水質の改善や外来生物(アメリカザリガニ、ブルーギル、カミツキガメ等)の駆除を行い、池の生物多様性を保全するものだ。採取した生物の生息状況や、外来生物についてはその生物がなぜ生態系に悪影響を及ぼすのか、といった解説が織り込まれる。この番組については、手法が乱暴ではないかとの意見もあり、手放しでは受け入れられない。しかしながら、身近な池から思いもよらぬ生物が採取されたり、ある種が異常に繁殖していたりする様が映し出されると、外来生物による生態系や自然の破壊、経済活動による外来生物の流入、人間の生物を飼う責任、温暖化の影響など、様々な現代社会の課題について考えさせられる。

農業現場においても外来生物の影響は深刻だ。仙台に赴任中、東北管内で「アレチウリ」や「帰化アサガオ」等の帰化植物がまん延した大豆畑をたくさん見た。これらの外来植物は成長が非常に速く、長いツルと大きな葉で一帯を覆い、一般の環境では在来植物を枯らしたり弱らせたりする。さらに近年では、大豆畑など圃場にも侵入し、甚大な被害をもたらしている。弊社でも大豆畑の帰化雑草対策として、大豆生育期の手取り除草からの解放を目的に非選択性除草剤専用の塗布器(パクパクPK89)を宮城県古川農業試験場および機械メーカーの株式会社サンエーと共同開発した。しかし、帰化雑草の繁殖力は高く、除草剤以外の耕種的防除を含めた総合的な対策が必要となっている。

いまや外来生物の影響からの保護は、池の生物だけでなく、農業においても大きな課題である。この状況を生産者はもちろん、もっと多くの人に気付いてもらいたい。